



World End
Chronicle
Before you betray the world
Story by Shimono Osukai
Art by Isegawa Yasutaka

霜野おつかい
イラスト イセ川ヤスタカ

君が裏切る前に

特別試読版 ep2

GA文庫

相反する少年少女が
世界を再構築する
ヒロイックファンタジー!

世界を救うため、
彼女と手を取り合い戦え

私が世界を
滅ぼす前に、
どうか私を
救って
ちょうだい

一章

災厄王女

トランヴァース王国。

それは三百年もの昔、魔神を打ち倒した英雄——イオン・トランヴァースが築いた、世界有数の大国だ。

領土は広大で、王都が海に面しているために他国との交易が盛んで人口も多い。

暮らす種族も人間だけでなく、エルフや竜人、亜人など、実に多岐たきにわたっている。

海沿いの小高い丘に建った王城は、国の象徴として広く民から愛されていた。

しかしその城が、本日はとある変事に見舞われていた。現場は城の敷地内。

海を見渡せる、屋外パーティ会場だ。

「きゃあああああああ!?」

会場を揺らすのは、つんざくような悲鳴と怒号。

仕立てのいい礼服やドレスが汚れるのにもかまわずに、蒼白そうはくな顔で逃げ惑うのは各国から招かれた賓客ひんきやくたちだ。

彼らは数分前まで立食パーティを楽しんでいたはずだが、その和なごやかな空気など見る影もない。テーブルは軒並み横倒しとなり、豪華な料理があちらこちらに散乱していた。

「お怪我けがをされた方はいらっしやいませんか!? どうか

慌てず、指示に従って避難してください！」

「あああクソっ！ だからこんな警護任務なんて嫌だったんだ！」

護衛に当たっていた魔道騎士たちが声を張り上げるも、混乱は広まる一方だ。

そんな彼らの頭上では――。

「グルアアツアアアアアア!!」

巨体をくねらせて、一匹のドラゴンが飛び回っていた。

城と肩を並べるほどのずんぐりとした巨軀きよくは、銀色の鱗うろこで覆おおわれている。

見る者が見れば、はるか千年前から形を変えずに存在する古代魔道生物――エンシェントドラゴンだとわかる

ことだろう。この大陸では滅多めったに見ることのできない希少な個体だ。

「きゅ、急にどうしたんだよポチ！　いつもは大人しい子なのになんでっ、ぶげっ!?」

飼い主らしき竜人の男性が、ドラゴンの太い尻尾しっぽで打ち据えられて地面に沈む。

身体の頑丈さで有名な竜人族とはいえ、これにはひとたまりもなかったらしい。

やがてドラゴンは空中で大きく息を吸い込んでいく。ドラゴンブレスの前兆だ。

体内のマナ袋で高圧縮されて放たれる光熱線は絶大な威力を誇り、向こう数キロ先までを焦土と変える。おか

げでますますパニックが広がっていった。

だが高等魔道生物であるドラゴンを鎮圧できるとはいえず、この場にいるはずもなく――。

「影導魔術・第三階梯かいてい！ 《影縛シャドーブインド》！」

「ッ!？」

その瞬間。

ドラゴンの影がざわりと揺らめき、何十本もの触手と化して巨竜の身体を絡めとった。

おかげで地表の誰もだれが逃げる足を止めてその光景に見入ってしまう。

そんな中、誰かが叫び、指をさす。

「あっ、あれは!？」

その先にいたのは魔道騎士の制服に身を包んだ人影だった。手足に強化魔術の光をまとったそれが、影の触手の上をまるで坂道のようにぐんぐん駆けあがっていく。

「其は五つの源、深淵なりし青の王！ いざ万象の理を
超えて——」

黒い人影が紡ぎあげるのは、長く複雑な魔術詠唱。しかしその詠唱が終わるよりも早く、影の拘束が外れてしまう。ドラゴンが無理やり首をひねり、巨大な罅を開く。一瞬にしてその喉の奥からあふれ出るのは青白い光。

「へっ」

その軌道線上にいたのは、魔道騎士の少女で——。

「っ、あぶない！」

人ごみをかき分けて、誰かが飛び出してくるとのこと。ドラゴンがブレスを放つのと同時に。

人影は触手を踏みつけ空へと躍り出て……莫大ばくだいな魔力を解き放つ！

「精霊魔術・第五階梯……《永久フリージングなる眠りの凍奏曲プレリユード》！」

「ツツガアアアアアアア——!?」

空に輝く、青藍せいらんの魔方陣。そこから降り注ぐ凍ふてつく波動がドラゴンを打ち据え、あっという間に天高くそびえる氷柱へと閉じ込めてしまった。

一気にあたりの気温が下がり、季節外れの小雪がちらつく。

場内に沈黙が訪れる。

しかし……そのすぐあとに割れんばかりの歓声と拍手が轟とどろいた。

誰もが口々に英雄を褒ほめ称たたえ、あれは誰だと噂うわさする。しかし当の本人——氷柱の上に降り立ったクローウには、それに応こたえる暇はなかった。

「サクラ！ 無事、か……」

ドラゴンブレスが炸裂さくした方向に、サクラがいたのを確認していた。

もうもうと上がった黒煙に向けて叫ぶのだが、すぐにその声は尻しりすぼみになってしまふ。

なにしろ焼き払われた芝生の先には……驚くべき光景

が広がっていたからだ。

「ふう……間一髪だったわね」

「あ、あわわ……」

サクラをかばうようにして立つのは、ひとりの少女だ。長く艶やかな金の髪。

雨上がりの空を思わせるシアンブルーの瞳。

頬からあごにかけての線は流麗で、長いまつげがかすかな陰影を作り出す。

ほんのり薄紅に色づいた唇はまるで小さな果実のよう
にみずみずしい。

身にまとうのは白を基調とした優美なドレスだ。大きく開いた胸元からはよく育った胸が零れ落ちそうになっ

ている。腕につけた白手袋にはわずかなくすみもない。

まるでおとぎ話に出てくるお姫様。

だがしかし、美しいばかりの花ではないことを、その目に宿る強い光が主張していた。

ドラゴンブレスが襲い掛かったはずのサクラとその少女には、わずかな怪我もない。

それどころかふたりの周囲だけ、芝生は焼け焦げることもなく青々と茂っていた。まるで彼女らの手前でブレスが消失してしまったかのような不思議な光景だ。

少女は一息ついてからゆっくりと背後を振り返る。

「怪我はない？ 可愛い騎士さん」

「ひゃ、ひゃいつ……！」

声を掛けられて、弾はじかれたように立ち上がるサクラだ
った。

深々と頭を下げ、裏返った声で叫ぶ。

「あ、ありがとうございます姫様！ あっ、姫様にお怪
我は……!?」

「私は平気よ。あなたが無事でよかったわ」

少女は目じりを下げて苦笑するだけだった。

そんなふたりのことを……あたりの人々は遠巻きに見
つめて、ひそひそと言葉を交わし合う。

「竜のブレスを無効化するとは……災厄王女の力はこれ
ほどのものなのか」

「ひよっとして、この騒動も彼女の呪のろいのせいなのでは

……？」

「しっ！ 聞こえるわよ！ 私たちまで魔神に呪われたらどうするのよ！」

客どころか魔道騎士ですら怯えおびの色を隠そうともせず、彼女らに近付こうともしない。

そんな光景を氷柱の上から見下ろして、クロウは頬をかく。

「この時代から災厄王女って呼ばれてるんだもんなあ。まだ世界を滅ぼしてもいないのに……因果なもんだ」
深々とついたため息を聞きとがめる者はこの場にいない。

クロウは指鉄砲を作って、地表の少女に狙いねらをつける。

少女の名前はリン・カーネーション・フィン・トラ
ンヴァース。

この国の第二王女であり、そして……。

「俺^{おれ}がこの手で殺す女だ」

パーティーは当然のことながらそこでお開きとなつてしまつた。

客たちは全員城へと戻り、会場には後片付けに追われる魔道騎士たちが残るのみである。

そんななかで陽光を受けて輝くドラゴンの氷漬けは、ちよつとシユールなオブジェだ。

それをクロウは感慨深く見上げるのだ。

「はあ……昔は逃げることしかできなかつたけど。あつさり倒せちまうとはなあ」

「クロウくん！」

「うん？」

そこで、ひとりの魔道騎士が慌てた様子で駆け寄ってくる。

サクラだ。息を切らせて走る彼女の姿に、クロウの胸はすこし軋きしんだ。

「……サクラ。さっきは危なかつたみたいだけど、怪我はないか？」

「う、うん、私は平気……って、ああ!？」

サクラがぎよっと目を見張る。

「クロウくんの方が怪我してるじゃない！ ほらこー！
ほっぺた！」

「うん……？　ありや、ほんとだ。切れてんな」
そのときになつて気付いたが、右の頬にわずか数センチほどの切り傷が刻まれていた。

先ほどの戦闘で負つたものだろう。指で撫なでれば微量の血が付着する。

だが、こんなもの怪我のうちにも入らない。それなのにサクラは眉まゆをめいっぱい寄せてみせるのだ。

「もう……危ないことはしないでつて言ったのに。動かないでね。天翔ける神々の……」

サクラが呪文じゅもんを唱え始めると、淡い光がクロウの頬を

包みこむ。

そのままわずか数秒もかからずに傷は跡形もなく消え去った。

「これでよし。ほんっと、無茶ばかりするんだから」
「あはは、悪い悪い」
クロウは苦笑し、頬を搔く。

昔から彼女はクロウのことを気にかけて、あれこれ世話を焼いてくれたものだ。

それが疎^{うと}ましかった時期もあるものの……今となつては心地のいい時間でしかない。

だから今回も大人しく彼女に叱^{しか}られるつもりだった。
それなのに、彼女の口から次に飛び出てきたのは重い

ため息だった。

「うん？ どうしたんだよ」

「だって……クロウくんに引き換え、私ってダメだなあ
って」

サクラはうつむき加減にぼそぼそと。

「ドラゴンの前でなんにもできなくて、拳句の果てにお
姫様に守ってもらおう始末だし……こんなことじゃ、魔道
騎士として失格だよ」

魔道騎士。

それは、この国で治安維持の一端を担う者たちの名だ。
正義を志す者、代々魔道騎士を輩出する名家出身の者、
国家公務員という安定を求めめる者……動機は様々だが、

誰もが剣や魔術に優れており、広く市民に信頼されている。

ふたりも、そんな魔道騎士の一員だった。

この春に養成学校を卒業したばかりの新人で、今は現場で経験を積んでいる。

まだまだフレッシュな時期のはずなのだが……サクラは暗い顔で肩を落としてみせる。

「お父さんは応援してくれたけど……私、魔道騎士なんて向いてないのかなあ」

「……そんなことないさ」

そんな彼女の頭を、クロウは優しく撫でてやる。

「おまえがドラゴンに襲われたのは、事件の前線で客た

ちを避難させていたからだろ。逃げずにいたただけでも十分立派だ。ナデギリ司令官もきつと褒めてくれるって」

「……クロウくん」

サクラはぽかんとした上目遣いでクロウのことを見上げてくる。うわめづか

しかしすぐにその眉がぐっと寄ってー。

「クロウくん……なんだか最近妙に大人っぽいこと言うようになったよね。老ふけこんだって言うか、なんていうか」

「ぐっ……成長したと言え、成長したと」

「あはは、ごめんごめん」

そう言ってサクラはようやくへにやりと笑ってみせた。

「ふふ、ありがとね、クロウくん。すっごく元気出たよ。私もクロウくんに負けないくらいに頑張ってみせるんだから！」

「そりゃよかった。でも無理はするなよ？」

「えー、ドラゴンと戦っちやうクロウくんがそれを言っちやうの？」

目じりを下げてサクラはくすくすと笑い声をこぼす。たったそれだけでクロウの心には温かなものが宿るのだった。

（まさかまた、生きてこいつの笑顔を見るなんてなあ……）

ちよつとした幸せを噛みしめるクロウ。

だが、そこでふとサクラが小首をかしげてみせるのだ。「でも……クロウくん。どうして急にあんなに強くなつたの？」

「……えっ？」

「さつきドラゴンを氷漬けにした魔術って、精霊魔術の第五階梯でしょ？ あんなのうちのお父さんだって使えないよ。いつの間にあんな大技を習得したの？」

魔術には様々な系統が存在する。

五大元素を主として用いる精霊魔術、契約した存在を呼び出し使役するしょうかん召喚魔術、怪我を治す白魔術、呪術を主にする黒魔術……存在が確認されているだけでも十数種類。派生した流派も含めればたやすく百を超えてしま

う。

そしてその難易度を示すのが階段だ。

数字が大きくなればなるほどその威力は跳ね上がるの
だが、習得は非常に困難なものとなる。

第五階段の魔術など、使えるだけで出世コース間違い
なしの超難関魔術なのだ。

「学校じゃ魔術は得意な方だったけど……能ある鷹は爪
を隠すにしても限度があるよ」

「お、大げさだなあ……えっと、その。隠れて修行した
んだよ」

「それにしたって突然じゃない？」

内心焦るクロウのことを、サクラは何かを見透かすよ

うに目をすがめてじつと凝視する。

「そういえば……クロウくんが変わったのって一ヶ月くらい前からだよ。怖い夢を見たって飛び起きたあの日から」

「……そんなことあったっけか？」

「えええ、もう忘れちゃったの？ あんな盛大な寝ぼけっぷり、しばらく忘れられないんだから。ひよつとして……何か私に言えない悩み事でもあるの？」

「……いやあ、話せば長くなるんだけどな」

クロウは盛大なため息をこぼす。

しばしの^{しゅんじゅん}逡巡を経て、彼は重い口を開くのだが――。

「実は俺……十年後の未来から戻ってきたんだ」

「……は？」

「で、その未来だとこの国は滅んでてさ。俺はみんなの仇を討つためにバカみたいに修行したから、やたら強い魔術も使えるんだよ」

「……はい？」

言葉を紡ぐにつれて、ふたりの間の空気が完全に凍った。

サクラはぽかんと目を丸くして固まっているし。

あまりにいたたまれなさすぎて……クロウは無理やり口角を持ち上げて笑う。

「……っていう設定の本をこないだ読んだんだけど、面白くないか？」

「っ、もう！ 真面目まじめに答えてよ！」

「あはは、ごめんごめん。でも別になんともないって。ただこっそり続けてた修行が実を結んだだけだよ」

「ほんとに……？ 困ったこととかなんにもないの？」

「ほんとほんと。昨日だつて俺、おまえん家ちでたらふくご馳走になつただろ。心身ともに健康そのものだつて」

「たしかに起き上がれなくなるくらい食べてたよね……でもそんなに美味おいしかったの？ ふつうの家庭料理だつたと思うんだけど」

「それがいいんだろ。いやあ、いいお嫁さんになるよ、サクラは」

「ふえっ!? そ、そうなの……？ そこまで言うならま

た作ってあげるけど……」

ほんのり頬を朱色に染めて、ごにごによごによごと言うサク
ラだった。

なんとか無事に誤魔化^{ごまか}せた。クロウは胸を撫で下ろす。
まあ、久々のサクラの手料理に感極^{かんきわ}まったのは事実だ
が。

（信じてもらえるはずないよなあ。こんな荒唐無稽^{こうとうむけい}な話）
だが、事実なのだから仕方がない。
グローブで隠した指輪を、その上からこっそり握りし
めてみる。

しかし指輪は熱を発することなく、うんともすんとも
反応しなかった。

聖遺物——道標輪廻^{どうひょうりんね}。

クロウがその力を使ってこの時代に戻ってきて、およそひと月が経過していた。

今日までできる限りのことを調べ上げ……その結果、様々なことがわかっていく。

ひとつ。

やはりここは間違いなく、十年前のトランヴァース王国であること。

ふたつ。

町の景色や周囲の人物関係、国内外で起こる事件、国際情勢など……ありとあらゆるものがクロウの知る歴史と一致していること。

そして最後に、最も重要なのが――。

(この歴史は……変えられる)

今回の古代竜暴走事件が最たる例だ。

クロウの記憶では、ドラゴンは城の一部を半壊させるまで暴走を続け、死者こそ出なかつたものの多くのケガ人を生んでしまった。だが今回はクロウが迅速じんそくに制圧したことによりケガ人はゼロである。

ほかにも様々な検証を行っている。

本来は半年後に捕まるはずの奴隷どれい商人をフライングで検挙してみたり。

連続通り魔となるはずの犯人を、一人目を襲う寸前にとっ捕まえてみたり。

買い逃して悔しい思いをしたちよつとエツチなグラビアを、売り切れる前に買ってみたい。

大きな事件から個人的なことまで。

すこし働きかけるだけで、歴史は簡単に変わることがわかったのだ。

（ただまあ……今回サクラが巻き込まれたのだけは計算外だったな。あるとき襲われたのは俺の方だったし）

懐かしくも苦い記憶が蘇る。よみがえ

かつての歴史では、クロウは荒れ狂うドラゴンを前にして何もできず、ドラゴンブレスの直撃を受けた。そして先ほどのサクラと同じように、彼女……リインに救われたのだ。

(……あれが、すべての始まりだったんだ)

ひとり静かにこぶしを握り、クロウは小さく息をつく。物思いに沈んでいた間にも、あたりの片付けは着々と進んでいた。

壊れたテーブルなどはすでに撤去されてしまっており、目下のところ氷漬けのドラゴンをどう運ぶか検討されているようだった。

氷柱の真下では何人も魔道騎士たちが、ああでもない、こうでもないと話し合っている。

凍り付いたドラゴンをあらためて見上げてサクラが感嘆の声を上げる。

「それにしても、ほんとお見事だったよねえ……あと、

あれ。ドラゴンを捕まえたときの影の魔術もすごかったよ。あんなの初めて見たけど……なんて魔術なの？」

「ああ、あれは——」

その名を口にしようとした、そのときだ。

背後から、やけにはつきりとした声がかかった。

「影導魔術」

「っ……!?」

クロウはハッと背筋を正す。

おそるおそる振り返ってみれば、そこには小柄な少女が立っていた。

年のころはクロウやサクラとほとんど変わらないことだろう。

利発そうな顔立ちに、銀のツインテールがよく似合う。その頭には大きな三角帽子が乗っていて、スレンダーな体軀たいくを包み込むのは黒のワンピース。

一見シンプルな魔女スタイルなのだが、彼女はその上になぜか薄汚れた白衣をまとっていた。袖そではかなり余っているし、裾すそも地面に引きずりそうだ。

だが、少女に気にするそぶりはなく、ただ淡々と言葉を紡ぐ。

「超絶レアな高等魔術だ。ほかの魔術と比べて詠唱が短く済むくせに、破壊力は抜群。だがそのぶん習得が難しく、今の世じゃ滅多に使い手がないんだ」
帽子のつばを持ち上げて、ニヒルに目を細めてみせる。

「高位精霊魔術どころか影導魔術まで扱えるとは見上げ
たもんだ。おまえさんが例の騒ぎを収めたっていう新米
かい？」

「は、はい……！」

「クロウくんどうしたの？」

直立不動で返事をするクロウに、サクラは首をかしげ
てみせる。

しかしすぐに気を取り直したようで、少女に苦笑を向
けるのだ。

「あの、パーティのお客様ですか？ 申し訳ありません
が、ここはまだ立ち入り禁止なんです。避難場所にご案
内しますから、私についてきて——」

「ちよっ、待て待て、こちらのお方は——」

クロウが説明しようとした、その刹那^{せつな}。

「ひっ、うわああああ!?」

「っ……!?」

耳をつんざくような複数の悲鳴があたり一帯に響き渡る。

はっとして見れば、例の氷柱にひびが入っていた。瞬^{またた}

く間にひびは全体に広がって、真下にいた魔道騎士たちが慌てて逃げていく。やがて氷柱は大きく震え——。

バキィツ——!

「グウルアアアア!!」

氷の塊はついに砕け、ドラゴンが天高く咆哮^{ほしごう}を轟^{とどろ}かせ

る。その壮絶な音波によつて、あたりの樹木や魔道騎士たちがまるで紙のように軽々と吹っ飛んだ。

ドラゴンはしばしあたりを見回して……ギロリとこちらをねめつける。

その血走った目からは煮えたぎるような強い破壊衝動がうかがえた。

おかげでサクラがひっと短く息をのむのだ。

「なっ、なんでこつちを見てるわけ……!?」

「あー、さつき俺に負けたのを根に持つてるんじゃないかな」

「呑気のんきに言ってる場合なの!? あわわっ、こつちに来る

よお!?」

地響きとともに突っ込んでくる山のような巨体。

そんなものに直撃されれば人間の肉体など一瞬でミンチ确实だ。その迫力に、サクラが悲鳴を上げてクロウの腕にしがみつく。

「はあ、やれやれ。騒がしいこつたな」

そんななかで、件くだんの少女は冷静そのものだった。

小さい肩をすくめて懐ふところを漁あさって取り出したのは……やけに無骨な銃で。

銀に輝くそれをドラゴンに向けて――。

「お昼寝の時間だぜ、トカゲくん！」

「ツツ………!!？」

青空のもと砲声が響く。

その瞬間、ドラゴンが急停止して勢いそのままにずぎずぎと地面を滑る。

やがてそれはクロウたちの目の前で静止して……こてんつと倒れてしまうのだ。心地よさそうないびきが、大きく開いた口からこぼれ出る。

その眉間みけんには、寸分たがわずダーツのような矢が刺さっていた。

少女は銃口が吐き出す硝煙しょうえんをふつと吹き、ニヒルに笑う。

「はっ、特別調合の麻醉銃だ。いい夢見るといいさ」

「へ、え……？　嘘……あの子がドラゴンを倒しちやつ

たの……？」



サクラは目を疑うような光景にたじろぐだけだ。

そんな彼女に、クロウはこっそりと耳打ちする。

「下手な口利きかない方がいいぞ。あの方……英雄イオンの時代からいる伝説の魔法使いだ」

「……はい？」

「おや、おまえさんはあたしが誰か知っているようだね」
少女はいたずらっぽく微笑ほほえんで髪をかき上げる。

そうしてあらわになつた耳は、笹の葉のように長く尖とがつていた。

「改めまして自己紹介だ。あたしはエルフのトリス・メ
ギストスIIノヴァ。ここの王家お抱えの顧問魔術師さ」
「なっ……王家お抱え!？」

サクラが素っ頓狂^{とんきやうし}な声を上げてぺこぺこ頭を下げる。

「す、すみません、そうとは知らず失礼なことを……！」

「いいっていいって。っーかおまえさん、ひよっとしてヒデツグの子かい？ 名前は、えーっと、サクラちゃんだっけ」

「は、はい。そうです。サクラです。あの……父をご存じなんでしょうか？」

「ああ、あいつとは昔から飲み仲間だね。うんうん、賢そうな子だ。あいつが自慢するだけはあるな。で……？」

サクラに笑いかけていたかと思えば、トリスはクロウ

に視線を向ける。

「そっちの少年、名は？」

「……クロウ・ガーランドといいます」

「クロウか。いい名だ。聞いたよ、さっきは大活躍だったそうだね。ドラゴンを仕留めたんだって？」

「いえ、ちよつと動きを止めただけっていうか……そこまで大層なこととはしてませんよ」

「なに、謙遜するなよ。影導魔術を使う新米なんて三年生きたあたしですら初耳だ。これを逸材と呼ばずになんと呼べっていうんだ」

「あはは……ありがとうございます」

背中を流れる冷たい汗を感じながら、クロウは懸命に

愛想笑いを浮かべてみせる。

実を言うと、彼女のことは非常によく知っている。なにしろ未来ではいろいろと世話になっっていたからだ。この時代に戻ってきたときも、まず真っ先に彼女を頼ることを考えた。

だがしかし、そんな甘い考えは浮かんで数秒ぽっちで捨て去っていた。

「しかし影導魔術かー。そっかー」
トリスはにたにたと笑いながら、一歩一歩クローウへの距離を詰めてくる。

そうして目の前で立ち止まると……ギロリとその双眸そしゅうぼうを光らせた。

「おまえさんさあ、いったいどこでその魔術を学んだんだ？」

「ど、どこでって……普通に訓練しただけですけど」
「おいおい、冗談きついで。そいつは英雄イオンが編み出したオリジナルの魔術だ」

トリスは口角を大げさに持ち上げる。

英雄イオン。

それは三百年前に魔神を打ち倒し、トランヴァース王国を築いた伝説の人物だ。

彼は剣に優れて魔道に長け、どんな強敵も打倒した天才であったという。

「現存する指南書は、あたしが奴から預かった一冊のみ。

このあたしに師事する以外に、習得する術はないはずなんだよ。いつたいたいどこのどいつに教わったんだ？」

「えっと、実は……」

未来のあなたに教わりました……なんて言っただって、信じてもらえないはずがない。

むしろ相手の猜疑心さいぎしんを煽あおるだけだろう。

だからクロウはあいまいに笑うのだ。

「……師匠から、死んでも名前を出すなって言われてまして」

「ふうん。マジで死んでも？」

「そうですね。めっちゃくちゃ怖い人ですんで」

「そっかー」

トリスはふっと口角を上げて笑う。

それと同時に、張りつめていた空気がかすかに緩んだ。
「まあいいさ。今回の活躍に免じて、虐めるのはまた今度にしてやるよ。しっかしよりもよって影導魔術とは懐かしい。イオンのやつを思い出すよ」

「イオンのやつ、って……」

そこでサクラが小さく首をかしげる。

「ひょっとして……英雄イオンとお知り合いだったんですか？」

「うん。自慢の悪友ってやつだったよ」

「ほ、ほんとですか!? すごいです! 私、英雄イオンのお話が大好きなんです! よくお父さんにせがんで絵

本を買ってもらいました！」

「おお、そうかい？ おまえさんみたいなファンがいるならあいつも草葉の陰で喜ぶねえ」

「特にあの、ナイフ一本でドラゴンと戦ったっていうお話が好きなんですけど……あれって本当のことなんですか？」

「おいおい。そんなデタラメを本にしてるのはどこの出版社だよ」

「あ……そうですね、やっぱいくら英雄イオンでもナイフ一本じゃ——」

「ナイフじゃなくて、えもの得物はそこらへんにあつた枝きれだった。正しく描いてもらわないと」

「絵本よりすごいじゃないですか!？」
きやつきやつとはしやぐサクラだった。

それにトリスは満足そうに笑い声をあげて……クロウは完全に蚊帳かやの外である。

ほっと胸を撫で下ろすと同時に、すこしばかり鼻がツーンとした。

（顔が見れてよかったな。この時代はまだ元気そうだし……）

トリスもまた、十年後の未来では故人となっていた。彼女にとっては初対面でも、クロウには懐かしい再会なのだ。

そんななか、サクラはふと首をひねって眠り続けるド

ラゴンを見やる。

「ドラゴンといえは……どうして急にあば暴れ出だしたんでしようね。氷漬けになつてたはずなのに」

「む？ あー……そりゃたぶん、あいつが来たからだろうな」

「あいつ？」

とたんに口ごもつてしまつたリス。

その反応に、サクラはますます不思議そうな顔をするのだが――。

「悪かつたわね」

ムスツとした声に全員が振り返る。

すこし離れた場所に立っていたのは、メイドを従えた

ひとりの少女。

先ほどサクラをドラゴンの脅威から救った、かの姫君——。

リイン姫、その人だった。

「り、リイン姫様!？」

あわててその場で敬礼するサクラ。

その声に、あたりの魔道騎士たちがぎよっとして振り返った。

「げっ……災厄王女様……!？」

そのままみな一様に顔を凍り付かせ、間髪いれずにばたばたと立ち去っていった。

彼らの背を見送って、トリスは苦い顔でリインを見や

る。

「だからやめとけって言ったろ、おまえが出てきちゃ怯おびえさせるだけだっつて」

「こんなのいつものことじゃない。庶民にどう思われようとかまわないわ」

リインはふんつと鼻を鳴らしてみせる。

人々からあからさまに避けられているというのに、それを気にするそぶりもない。

そんな彼女にトリスはおおきょうし大仰に肩をすくめてみせるのだつた。

「まったく難儀なお姫様だよ。それで、だ。クロウ。どうもこいつがね、おまえさんに礼を言いたいんだとよ」「よ

「俺……ですか」

「ええ、そうよ。あなた」

距離を取ったまま、リインはじつとクロウを見つめる。その澄み切った空のような瞳と目が合った瞬間、クロウは弾かれたようにその場にひざまず跪いた。深く首を垂れた彼に、リインは静かに言葉を投げかける。

「騒動を治めてくれてありがとう。王族を代表してお礼を言うわ」

「はっ。もったいなきお言葉です」

「あなた、名前は……？」

「クロウ・ガーランド、と申します」

「……そう。クロウ、ね」

リインはため息とともに彼の名前を口にした。

クロウは跪いたままだ。顔を上げることもない。

なにしろ……まともな愛想笑いを作れる自信などなかったからだ。

口はつり上がり、目は夜闇よやみに乗じて獲物を狙う鷹たかのような光を帯びる。

鏡を見なくてもわかる。そこにあるのは、復讐ふくしゅうに燃える悪鬼羅刹あくつきらせつの形相ぎょうしやうだ。

かつての歴史で——クロウは今回のように、このパティの護衛に駆り出された。

そしてドラゴンに襲われて……彼女、リインに助けら

れた。

それをきっかけにしてふたりは出会った。それが、破滅のはじまりだったのだ。

運命を狂わすあの出会いを、クロウは今ふたたびやり直そうとしている。

その目的はただひとつ。

破滅の未来を変えるために――。

（すべての元凶であるこいつを……リインを、今のうちに始末する！）

だが、ことを急^せいではいけない。

相手の懐にもぐりこみ、慎重に殺す機会をうかがうべきだ。

べつに今この瞬間に、腰に下げた剣で彼女の首をかつ切ってやってもいいのだが……。

「すごいよ、クロウくん！ 姫様から直々じきじきにお褒めの言葉をいただくなんて……！ がんばったかいがあつたね！」

「……そうだな」

無邪気によるこぶサクラに、クロウはこっそり苦笑を向ける。

クロウ自身は、リインを殺したことで極刑に処されようと、お尋ね者に成り下がろうと、受け入れる覚悟がある。それで未来が救われるのなら安いものだ。

だが……王族の殺害など重罪中の重罪である。

へたをすれば自分の周囲の人間に多大なる迷惑をかけるてしまうことだろう。

（だから、誰にもバレずにリインを始末しなきゃならぬい）

つまるところは、暗殺だ。

クロウはちいさく息を吐く。

じんわりと手ににじんだ汗は乱雑にぬぐっておいた。

ここからの計画は簡単だ。この出会いをきっかけにリインに近付き、殺す手立てを整える。かつての歴史でも同じような流れで距離を縮めたので、問題はないだろう。

（それに……聞きそびれた答えが、わかるかもしれないし）

彼女がなぜ、この世界とクロウを裏切ったのか。

あのおとき答えが返ってくるこのなかだった疑問に、答えが見つかるかもしれぬ。

そう期待していたのだが……。

「それにしても……」

「はい……？」

ラインが刺々しい吐息をこぼす。

おもわず頭を上げてみれば、鋭い視線とかちあつた。

「あなた、見たところ見習いの魔道騎士だと思うけど

……どうしてあんなに強いわけ？」

「へ？」

「ドラゴンを倒すなんて、うちのトリス並みじゃない。

変わった魔術も使っていたようだし……見習いとは思えないわ」

「え、えっとそれはその、最近ちよつと特別な修行を積みまして……」

「はあ。修行、ねえ」

リインはクロウをじろじろと見つめる。

まるで不良品の検分でもするようなその無遠慮な視線に、クロウは息を詰めるしかないのだが……やがて彼女はあごに手を当て、おもいつきり眉をひそめて告げる。

「なんだかすつごく……怪しいわね」

「つ……そ、そんなことないっすよ、あはは……」

唸^{うな}るようなその声は、地の底から響くような低いもの

で。

おかげでクロウは引きつった愛想笑いに努めるしかない。

（なんでだ……!? 前の歴史のときはもつとふつうに和やかな会話になったはずだろ！ これじゃ距離を詰めるどころじゃ……あっ）

そこでふと気付くのだ。

以前のクロウは、ドラゴンの脅威の前になすすべがなかった。

だから助けってくれたラインに誠心誠意の感謝を述べて、そこから交流が始まったのだ。

だが、今回のクロウはドラゴンを難なく制圧してしま

っている。

（俺があのとときと違う行動を取ったから、ラインの反応も変わったってことなのか……？）

ふたりの間に流れるのは重くじつとりとした嫌な空気。それを感じ取ったのか、サクラがおずおずと口を開くのだが――。

「あ、あの、リン様。クロウくんは怪しい人では……あれ」

そこでふと怪訝けげんな声を上げる。

「リン様、その手首……お怪我をされたんですか？」

「え？ ああ、これ？」

言われて見ればラインの右手首がうっすらと赤く腫はれ

ていた。

それにトリスが目丸くする。

「ありゃ、ドラゴンブレスの熱気で火傷やけどしたのかね。も
っと早く言えよな、おまえ」

「これくらいどうってことないわ。あとで冷やせば平気
だし」

「あっ、だったら私に任せてください！ 白魔術は得意
なんです。さっき助けていたただいたお礼に——」
「待って」

立ち上がり、駆け寄りかけたサクラのことをリインは
ぴしゃりと制止する。

「治療は結構よ。それより、危ないからそれ以上は近付

かないで」

「へ……？ あ、危ないって、なにがですか？」

「なにつて……この国の人なら、私の呪いを知らないはずがないと思うけど。そうね……」

リインは肩をすくめて、そばに控えたメイドに手を伸ばす。

これまで一言も発さず立ち尽くしていた彼女の肩に、その指先が触れた瞬間。

ズシヤツ！

「ひっ……！」

メイドはその場で四散して、体がいくつもあたりに散らばった。

それにサクラがびくっと凍り付くのだが、トリスは「心配ないや」と苦笑をこぼす。

彼女がひょいっと持ち上げるのは足元にころがったメイドの首だ。

その断面はつるりとした木材で、一滴の血も滴したたつてはいなかった。

「こいつはあたし特製の魔道人形でね。リインが触れたせいで機能停止しちゃっただけさ」

「こんなふうには、私はどんな魔術も無効化してしまうの」

リインはあたりに散らばる氷のかけらを見やって、ため息をこぼす。

「魔術の氷は近付くだけで溶けちゃうし、ドラゴンみたいな魔道生物の攻撃も効かないわ。それだけじゃなく……私の周りではいろんな災いが起こるの。だから、それ以上近寄っちゃダメなのよ」

「わ、災いだなんて……そんな大げさな」

「おっと。サクラはこいつに会うのは初めてか。クロウは？」

「……姫様の呪いについてなら、よく存じ上げています」

余計なことをこぼさないように、クロウはただそれだけ言っつて口をつぐんだ。

リインの特殊能力は国内外でも有名だ。

ただし尾ひれ背びれがっついていることが多く、正確な事情を知る者は少ないことだろう。

トリスはふむふむとうなずく。

「それじゃ、サクラのために簡単に説明してやろう。今から三百年ほど前、魔界から侵攻して来た魔神つづーバケモンを、たったひとりでぶっ倒した英雄がいた」
それがこの国の初代国王。
剣と魔法を修めた伝説の英雄、イオン・トランヴァー
ス。

彼は魔神を倒し、この世界を救った。

「だが……魔神はいまわの際に、イオンに厄やっかい介な呪いを
かけやがったんだ」

魔神が最期さいごに残したのは次のような言葉だったという。
いわく——。

汝なんじの血に呪いあれ。

汝の肉に穢けがれあれ。

その血肉を受け継ぐ娘がいつの日か、この世に災厄を
振り撒まくだろう！

「そして、その呪いを受けて生まれてきたのがこいつ
……第二王女リイン姫ってわけよ。噂くらいは耳にした
ことあるだろ？」

「は、はい……一応は。でも、全部ただの噂だとばかり

……」

「そいつがどっこい真実なのさ。こいつの受けている呪いは厄介なものでね」

トリスは人差し指をくるりと回す。

すると光の球が現れて、ふよふよと彼女の周囲を漂いはじめた。

「この世界にはマナと呼ばれる様々な種類の力があふれている。たとえば火のマナをかき集めてやれば……これ、このとおり」

ぱちんと指を鳴らせば、光は火球となつて燃え上がり、空気を熱して消えてしまう。

初歩的な精霊魔術だ。

「こうしてマナを利用して、奇跡を編み出す技術のこ
とを魔術と呼ぶ。まあ、例外がないわけでもないけど
……」

そこでトリスはクロウをちらりと見やる。
しかしすぐに視線を外し、リインをあごで示してみせ
た。

「魔神の呪いを受けたこいつは、ただそこにいるだけで
マナをかき乱しちまうのさ。当然魔術は無効化されるし、
おかしな騒動も起こるってわけ」

「そうよ。ドラゴンが暴れるなんて日常茶飯事なんだか
ら」

リインはうんざりとばかりに肩をすくめてみせる。

彼女の逸話には枚挙にいとまがない。

生まれたときは、国の大火山が噴火を起こした。

ほかにも落雷によつて城が半壊したり、大地震が起きたり、貴重な魔道具が触れてもいないのに壊れたり……その周囲では、史上稀まれにみるような異常事態が次々に発生するのだ。

だから彼女はこう呼ばれる。

世に災いをふりまく姫君。

災厄王女、と。

「で、あたしの仕事はこいつの護衛つてわけ」

トリスは銃を取り出してくるくと回してみせる。

「こいつのそばだと魔術が使えないから、銃だの科学だ

の医術だの、一から学んだんだぜ。薬だつて魔術薬は飲ませてやれないし、いろいろ苦労してるんだよねえ」

「そ、そうだったんですか……すみません、リイン様。

私つたらなにも知らなくて」

「いいのよ、気にしないで」

申し訳なさそうに縮こまるサクラに、リインは事も無げに言う。

「たしかに厄介な呪いよ。怪我をしたつて魔術で治してもらえないし、一緒にいると危ないからつて……家族と暮らすこともできないし」

幼少の頃から、リインは別邸でトリスとふたりきりで暮らしている。

名目上は療養。だが実際のところは、軟禁と言ってもいいような扱いだ。ほとんどの自由を制限されていて、滅多なことがなければ外出の許可すら下りない。

まさにお伽話ときばなしに出てくるような、悲運の姫君。

それなのに、彼女は明るく笑うのだ。

「でも、私はこの呪いを誇りに思うの」

「えっ……呪いなのに、ですか？」

「そうよ。だってこの呪いは……私のご先祖様が世界を救った証あかしみたいなものだから」

きつぱり言い切るラインに、サクラははっと言葉をのみこんだ。

「だから私はへこたれたりなんかしないんだから。呪い

くらいひとりで背負ってみせるわ」

「でもおまえ、さっきめちやくちや落ち込んでたじゃねーか。『私のせいで女の子に怪我させそうになっただろって』」

「うぐっ……そ、それとこれとは話が別よ！」

リインはトリスをじろつとにらみつけ、もじもじと小さくなつてサクラに頭を下げるのだ。

「あの、言うのが遅くなっただけ……さっきはほんとにごめんなさい。私のせいで巻き込んでしまつて……」

「そ、そんな……リイン様はなににも悪くないですよ！」

私のことを助けてくれましたし、それにリイン様の方こそ怪我をしてるじゃないですか……！」

「私はいいの。これくらいの傷、慣れてるし」
赤くなつた手首を撫でて、リインは苦笑する。

「怪我をするのも、みんなに怖がられるのも慣れたけど
……誰かを傷つけるのだけは、やっぱり嫌なの。あなた
が無事で本当によかつたわ」

「リイン様……」

「本当はほかのお客さんたちにも、ちゃんと頭を下げて
回らなきやいけないんだけどね……私が行くと絶対怯え
させちゃうし……あはは……はあ。うう、だから誕生日
パーティーなんて開かなくていいつて言つたのよお……」

「仕方ないだろー、おまえ仮にも王族なんだから。媚こび
を売りたいやつつてのは国内外にいくらでもいるんだよ。

ま、そいつらも今回で懲りただろうけどなー」

トリスは軽く笑い飛ばしながら、落ち込むリインを励ますように叩たたいてみせる。

その、かつてよく見た光景にクロウは小さくため息をこぼすのだ。

(……そういや、こんなやつだったよな。リインって) 逆境に負けない強さと、人を思いやる心を持った優しい少女。

世間での評判とは真逆のようなギャップに、クロウは強く惹ひかれたのだ。

だから出会ったこの場で、彼女の護衛になることを志願した。

助けてもらった恩を返すため。

彼女を襲う不幸からすこしでも守ってやるため。

そして……今思えば、あれはひとめぼ一目惚れだったのだ。

（だけど、こいつがいつかこの国を滅ぼすことを……俺だけが知っているんだ）

クロウの心には、もはや迷いはなかった。

ただおのれ己の使命だけを噛みしめる。

（とりあえず、このまま前みたいに護衛の座に収まってチャンスを待とう。えっと、たしかあのときは……）

クロウはリインの言葉に胸を打たれて――。

「だったら私が……姫様の支えになります！」

そうそう、こんなふうに申し出て……。

………うん？

はっとして見れば、サクラがラインのもとに駆けだすところだった。

白手袋を差した彼女の手をぎゅっくにぎってー。

「どうかおそばで守らせてください！　ライン様！」

「………はい!?」

その場の全員が素っ頓狂すどんきやうな声を上げることになった。

目を丸くして固まっていたラインが真っ先に我に返る。

「えっ………ええええ!?　今の話聞いてた!?　私のそばに

いちや危ないのよ!？」

「そんなの百も承知です！　でも、危ないのはライン様

も一緒じゃないですか！」

サクラは一步も譲らない。

そればかりかハンカチを取り出して、それをリインの赤くなつた手首に巻きつけてみせる。

「魔術で傷が治せなくても、手当てはできません。私、衛生士の資格も持っていますし……きつとお役に立てると思います！　どうか先ほどのご恩を返させてください！」

「いやいやいや……！　そんなの急に言われても困るっというか、なんていうか……！」

「ふうん、悪くないかもね」

「ちよっ……トリスまでなにを言い出すわけ!？」

「だってあたしも四六時中そばにいれるわけじゃないし

ー?」

ラインに迫るサクラを見つめて、トリスはあごを撫でてみせる。

「さつきみたいに、目を離れた隙すきに騒動が起こることだつてあるし。ナデギリ家の子なら身元はたしかだし、有事の際の避難誘導くらいはできるだろ。つーわけで、とりあえず一ヶ月くらいお試しでやってみるか?」

「はい! ぜひともお願いいたします!」

「私の意思は!?!」

「え、え、え……え?」

急速に進んでいく彼女らの話に、すっかりクローウは置いてけぼりだった。

本来なら、サクラの位置に自分がいたはず。

（なんでこうなった!? 落ち着け……いったい何を間違えたんだ!? 前の歴史を思い出せ……!）

前回の歴史で、クロウはリインに救われて、そばで支えることを決意した。

なら、今回の場合は……?

リインに救われたサクラが、クロウのかわりにこう言い出すのは……。

（順当な流れじゃねーか!）

そこまで気付いた瞬間に、クロウは勢いよく右手を上げていた。

「はい！ お、俺も！ 俺もリイン姫の護衛に立候補し

ますー！」

「え、おまえさんも？　なんで？」

「ぐっ、う……さ、サクラひとりだけじゃ心配だからですよー！」

「あー、まあ、わからなくてもないな。じゃあさ……」
トリスはにかつと笑って。

「だったらおまえさんはあたしの助手とかどう？」

「えっ……？」

「影導魔術が使える新人なんて鍛えがいありそうだしさ。師匠の話も聞かせてほしいし。それで暇なときはラインの護衛をしてくれりゃいいさ」

「いやいやいや!?　護衛メインでお願いしますよ!?」

「えー。だつてこいつ、ほとんど郊外の屋敷でこもりつきりなんだぜ？ おまえさんみたいな実力者が四六時中守つてやる必要なんてないんだつて」

「うぐっ、そ、それはそうかもしれませんが……！」

「そんじや話は決まつたな。よろしくなー、サクラ」

「はい！ 一緒にがんばろうね、クロウくん！」

そう言つて拳を握るサクラの瞳には、熱いやる気が宿つていて――。

「ウソだろ……」

「ウソでしょ……」

呆然とこぼしたセリフはなぜかラインとかぶつてしま

つて、互いに無言で顔を見合わせる羽目になつた。

相反する少年少女がセカイを再構築する ヒロイックファンタジー大作



2019年2月15日頃
全国の書店さままで発売!

著：霜野おつかい／イラスト：イセ川ヤスタカ